

ゆたかの飛耳長目(第4回)要旨

日時	令和4年8月22日(月)午前9時30分～11時30分
場所	安曇野市役所 3階 共用会議室306
テーマ	①子ども達の探究学習支援 ②ふるさと遺産と重要文化的景観 ③移住支援と空き家活用
参加者	NPO法人 安曇野ふるさとづくり応援団の皆さん 5人

●子ども達の探究学習支援

(参加者) 昨年从小中学校で「ふるさと探究」という取り組みを進めている。今は、各校の要望に合わせて探究するテーマを決めているが、今までやっていただいた学校は非常に反応が良く、どんどん参加校が増えていくだろうと思う。そうすると、私達の団体だけで単独で行うのは難しい部分も出てくると思っている。それから、今、いろんな小中学校からの依頼は、基本的にその個々の関係性がある所から話が来ているが、市として「安曇野の時間」を設けているのであれば、この「ふるさと探究」という事業を学校側に伝えていただき、仕組みとして、学校の負担にならずに地域と連携するということも、ぜひやっていきたいと思っている。

(参加者) 今は県の支援金を受けて事業をやっているが、それも来年度までなので、ぜひ安曇野市と連携しながら、きちんとやっていくような仕組みを作りたいなというふうに思います。

(参加者) 学校からは費用をいただいているわけではないので、やっぱりその辺、一定の自己負担をいただく中で、どの程度までできるのかってということも探っていく必要もあると思います。必要経費分をどうやって確保するか、それができないと継続性がなくなってしまうことも問題かなというところですね。

(市長) こういった多くの場合は、継続性というところが最後ネックになってきて、一つはメンバーが高齢化されたとき次代を担う人が中にいらっしゃるかは非常に大きいですし、もう一つはやっぱり費用の面。会員の方の自己負担だけでは賄いきれないものですので、もちろん県の補助金は今回貰っていますし、実際に市がどういう支援ができるか考えたいと思います。これから取り組む学校が増えていけば、自分たちだけでは難しいですね。その点は、教育委員会も含めて検討します。

(参加者) 私どもの会員は年配のメンバーが多いので、なかなか世代間の格差もあり、子どもさんの対応については難しい部分がある。なので、中間的な部分で、また担い手として、子どもさん、高校生、大学生など、活動の仲間に入っていてくださいね、世代間の繋ぎ役をしていただけないかなということを考えています。

(参加者) 今、教員を目指しているような大学生に活動に参加してもらえないか、大学側と交渉している。大学側からは、いろいろと協力はできそうだが、いざやろうとなった際に、大

学生が車を持ってるのが少ないので、足をどういうふうに確保するかが課題だと言われた。大学と各教育委員会との連携では、基本的に各市町村で、足を確保してもらおうという前提で事業を進めているということなので、その辺をぜひお願いできないかなってところがあります。

(参加者)効果的な話をさせていただくと、私どもの年代とひ孫の年代と、その中間にいる人がいないとですね、話題が繋がらないですね。活動の主体はやっぱり若い人にやってもらってます。子どもさんたち、大学生の皆さんのところに蜂の巣みたいに寄ってたかっての大人気なんですね。また大学生も堪能してるようなんですね。それが世代間の繋がりになるかなと思っています。

(市長)そうですね。教職を目指される学生さんが多いとすれば、それはいわゆる教育実習とは別の場面で、お子さんたちと具体的に触れ合う場面があるってことは、彼らにとっても非常にいいことだと思いますね。足の確保というお話は、公用車を使うとなると規定がありますので、ちょっと調べてみます。

(参加者)また、探究学習については、これから区や公民館など地域との連携も深めていきたいなと思っています。

●ふるさと遺産と重要文化的景観

(参加者)ふるさとづくり応援団では、「ふるさとウォッチング」を30回やってきたが、旧穂高宿っていうのは特別なところだと感じている。旧穂高宿は、松本から糸魚川の千國街道の中では一番大きい宿場町。街並みがまだ残っているので、何とか大事にしていきたい。一番僕たちが問題だと思っているのは、他の所から来た人は、旧穂高宿が素晴らしいって感じてくれるんだけど、地元の方たちが割合そういう意識がなくてですね、どんどん古い家並みがなくなってしまうことが心配されます。穂高には、安曇野まちなかにぎわいプロジェクトっていうのがありまして、今年もコロナで残念ながらできませんでしたが、7月7日の夜に七夕まつりをやり出しているんですね。非常に雰囲気のある、夜になるとまちなみができる。それも含めてですね、穂高宿もその一つなんですが、なんとかそういう重要な景観を残したまちづくりを進めてほしいと思っています。旧穂高宿と穂高神社、碌山美術館なんかを繋げた一つの回廊みたいなのを作ろうという話も出ましたが、うまく活かしていけないかなあとと思っています。

(市長)重要文化的景観にしても、重要伝統的建築物の保存にしても、そこに住んでいらっしゃる住民が自ら残したいっていう仕組みをとらないと難しいんですね。今おっしゃった、七夕のイベントみたいな形で、住民の皆さんが自分たちの住んでいる地域の景観であるとか、歴史であるとか、そういったことに理解いただくことがまず第一だと思うんですね。そう考えると、さっきおっしゃった、穂高神社から碌山美術館の回廊をつくるっていうのは、観光客の商店街の周遊に大変意味があると思いますね。私も前職の時に、全国の商店街を見に行ってきましたけど、地元の中でリーダーシップを取れる人がいることが一つと、もう一つは、人口減少の中で観光客がそのまちなみへ来て買い物をするっていう、この二つが揃って初めて景観なり、文化的なものを残すっていうのが出てきます。そこら辺をどうやっ

て仕掛けるかです。穂高宿の話は本当に千国街道の一つの所なので大事だと思っています。やっぱり街歩きのとくに、城下町、門前町、宿場町っていうのは特別ですね。

(参加者)あと、安曇野が持つてる屋敷林というものが風前の灯火の環境になってるので、それを何とかまちと協力して、まちの財産として残してほしい。結局は、保全するためのお金がないので維持ができなくなって、解体してしまう、朽ちてしまうという。今まさに、切羽詰まった状況になっている。屋敷林は個人の持ち物でありながら、安曇野の財産でもあるということの意識的なものは、親父さん達は良く理解してくれるんですが、その次の孫の代になると、「じいちゃん、もう、うちは嫌だから。いろいろ言われるから切ってしまうよ。」という話に。官民一体になって、屋敷林を守っていくことが大事じゃないかなと思います。

(参加者)私達も屋敷林プロジェクトをずっとやってきて、じゃあ屋敷林に対する関心が高まっているかって言うと、決してそうではないんですよ。ただ、今、屋敷林で検索すると安曇野がいっぱい出てくるようになったんですけど、市民の関心はやっぱりまだそこまでいってない。私達がふるさと遺産をやる中ですごく感じたのは、今までは屋敷林だけに目を向けていたんですけど、屋敷林ってそこにあるいろんな文化の結果なんですね。だから、やっぱりそういうストーリーとして屋敷林をきちんと位置づけて、このエリアの屋敷林は守ろうみたいな形で市民に呼びかけないと、個々の屋敷林っていう形で保全するっていうのは、なかなか難しいのかなっていうのがここ十数年やってきて感じています。どこかそういうモデル地区じゃないけど、やっぱり何か形にして見せない。

(市長)今仰ったことは本当に良く分かります。ただ具体論で言うと、おそらく年数十万かかりますよね。それが何百軒あるので、簡単な話じゃないですよ。屋敷林に対する個別の助成の仕方、これちょっと全国的にいい先例を見ながら考えないとですね。

(参加者)所有者もお金を求めているわけではないんですよ。私達がずっとやってて思うのは、所有者は屋敷林を自分たちが守ろうという想いで残し続けていることを理解してもらいたい。例えば、落ち葉が出ることで、周りに新しい住宅ができて後から来た人たちに文句を言われて肩身の狭い思いをして、っていう。せっかく残しているのに。だから、そこを分かって欲しいっていうのが切実な思いだと思うんですよ。

(市長)そうですね。かといって、文化財指定は困るって人はいっぱいいますからね。文化財に指定されちゃうと改築ができなくなるでしょう。その不便さを、先祖代々からの家に住んでいるうえに享受するんですかっていう話ですからね。難しいですよ。

(参加者)先日、文化課と都市計画部局で、その重要文化的景観制度についてちょっと意見交換をしたんですけど、今は重要文化的景観はいわゆる重伝建なんかには比べれば非常にゆるいんですね。届け出なので、逆に言うと景観計画をアレンジすればできる仕組みなんです。ですから、その辺からそういうもちろん地域である程度理解があるところから、何か形にしていくことが必要なのかなと。

(市長)おっしゃる通りです。きちっとした計画であげていけば、通る可能性は高いと思っています。ただ、やっぱり住んでいる方が、ここはぜひ残すべきだっていう議論をしてくれないと駄目なんです。外から言われて、重要文化的景観になりそうだって言われて、じゃあやりますかって話になってくると、継続性の問題が非常に難しいですね。地元の方たちの理解が深まってくればね、そういうふさわしい街並みに修景しましょうって話が出てくると

思うんですね。

●移住支援と空き家活用

(参加者)移住定住支援として、暮らし支援協議会というのがありまして、これは市いろいろな団体が集まってやっています。移住のイベントに参加すると、他所の自治体はですね、市の顔みたいな人がいるんですね、もうずっと移住の相談に乗っていて。安曇野市もね、一人はそういうプロフェッショナルみたいな人を育てなきゃいけないんじゃないかと思うんですね。また、今、市がやってるセミナーも重要ですけど、実際に安曇野に来てもらう体験ツアーがあって、そこに来る人たちは結構本気の人が多いので、そういう人たちにですね、もう少し支援をしたらどうかとか、そういうことをお願いしたいなと思っています。

(市長)移住定住についてはね、受け手側になる市の人は非常に大事だと思っています。安曇野市に誇りを持っておすすめできるかどうか、そこら辺が一つの大きなカギだと思っていますね。市もこれから専門的な方を、移住交流だけじゃないんですけど、増やさないといけないと感じています。

(参加者)あと以前から言われてるのが、おためし住宅っていうのがあって、その利用がまたコロナの制限もあるんですけど。今基本的に無料っていう形になっていて、で、実際にそこに泊まってる人で移住する人の比率が極端に低い。だから結局、タダで旅館替わりに泊まるっていう形になっちゃってるので。

(市長)無料だからいいっていう話じゃないと思うんですよね。さっきの話で、本気で来る人は、お金払ってでも来ますからね。この前ね、シェアハウスやってる人たちと懇談したんですよ。シェアハウスへ来て、1カ月とか住んで、気に入ったからってことで、結構移住につながる人が多いですね。シェアハウスは宿主もいるし、他の人もいるから、いろんな話聞けるじゃないですか。そういうのがあって初めて段々と決意が固まってくるんだと思うんですよ。

(参加者)結局最後に決めるのは、人とのやりとりですよ。それだったらお試し住宅止めて、そういうシェアハウスに泊まる人に補助した方がよっぽどいいのかなっていう議論もありますし。

(市長)それはね、この前、シェアハウスの皆さんと話して検討を始めてます。本当の意味でのお試しが必要だと思いますね。

(参加者)都会の人って、安曇野の地域コミュニティみたいなものは全く抜け落ちてるので、そういうのを誰かがきちんと説明してあげないとお互い不幸になっちゃうので、やっぱそういう部分は大事ななあと思いますね。

(市長)それは大事だと思います。やっぱ知らない土地に住むっていうのは大変なことで、その地域の習慣とかよく分からないので。例えば、新しい職場に行ったら、職場のチューターみたいなものつけてね、ここではこういうふうにやりましょうって教えてくれるじゃないですか。ところが、移住してきた人たちには制度そのものがないですよ。たまたま地域にいい意味でのお節介な方がいればいいけど、そうでなかったら放っておきっぱなしですよ。そこら辺はね、ちょっと整理をして、仕組みとして本当は必要かなと思いますね。

(参加者)これから、先ほどの空き家を活用するといったときに、それを活用する人として移住者も一つの大きな要素だと思うんですね。ただ、どうしても、移住者って個々の物件だけを見ようとっちゃうので、逆に例えば穂高宿だったら穂高宿を先に気に入っていただいて、そこで人との繋がりの中で、この人だったら貸したり売ったりしても安心だからっていうふうに、空き家活用に繋げていくようにしていかないと。

(市長)今、商店街で空き店舗いっぱいありますよね。ただ所有権の関係とか、結構複雑で、土地と建物が別だったりというのがありますが、本当はそういうところで起業できる仕組みをね、ちょっと考えたいと思ってます。そこで新しい仕事なり、新しい作業所なりをやってもらえば非常に面白いと思うんですね。あの木曾の上松町は、地域おこし協力隊を雇って、空き家で木工をやってもらった。その後、木工作品を売る場所も一緒に探してあげてってやっていったら、本当にうまく動き出しているんですね。そういう形で、もう少し安曇野に住むことを前提で、何か仕事をやりたい方に対して、地域おこし協力隊みたいな形で一定のお金を払って、安曇野のことを勉強してもらってPRをしてもらっていく、っていうことも考えたいと思ってます。